

2023年度

湘南白百合学園中学校
入学試験問題

国語

1 教科入試 60分

受験番号		氏名	
------	--	----	--

○受験番号・氏名は解答用紙にも書くこと。

* 答えは解答用紙に書きなさい。

一
後の問いに答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- ① オクガイで活動する。
- ② カクシンの技術。
- ③ 新しいエネルギー社会をテイショウする。
- ④ 世界記録をジュリツする。
- ⑤ 想像力にトむ考えが必要だ。
- ⑥ 美しい音色が聞こえる。
- ⑦ 背面からの光が美しい。
- ⑧ 内省する力が求められている。
- ⑨ 険しい山々がそびえる。
- ⑩ 彼は新世紀文学の旗手だ。

問二 次の(1)・(2)の会話から導かれることわざとして最もふさわしいものを後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

(1)

- A 「先生、このひもは何かに使えそうですか。」
B 「段ボールを束ねるのにも、袋の口をしぼるのにも使いにくそうだね。」
ア 大は小を兼ねる イ 長い物には巻かれる ウ 帯に短したすきに長し
エ 小異を捨てて大同につく オ 木を見て森を見ず

(2)

- A 「さくらさんを怒らせてしまったから謝りたいな。」
B 「優しいさくらさんが怒ったのを見たことがないわ。何をしたの。」
ア 急がば回れ イ 早起きは三文の徳 ウ 初心忘るべからず
エ 仏の顔も三度 オ 三人寄れば文殊の知恵

問三 次の□に漢字一字を入れて熟語を完成させたとき、①～③のそれぞれの組には一つだけ共通点のない漢字があります。その漢字を組み合わせてできるだけ三字熟語を答えなさい。

① □ 輪際 □ 二才 □ 一点 □ 式美

② □ 網打尽もうだじん □ 里霧中むちゅう 晴耕 □ 読 □ 面楚歌そか

③ 深海 □ 暗中 □ 索さく 花 □ 風月 森羅万しんら □

問四 次の文章を読んで、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

アメリカの北西海岸というのはどんなところかというところ、降水量が多い。たとえば、シアトルという都市のあたりはよく雨が降るといわれていて、大きな木が育ちます。冬は寒い。家に関する一般的なルールからいうと、大きな木が必要です。そこで、杉すきの板でつくった斜め屋根の家になれば、材料がたくさん手に入りますし、屋根が斜めだから、冬でも雪が積もりにくいということ、一つの結びついた知識ができあがります。そうすると「北西海岸のインディアンが、杉の板でできた斜め屋根の家に住んでいる」ということを覚えるのは、そんなにたいへんではなくなってきました。理由がわかればあたりまえのことになるのです。

ほかも同様です。一般的なルールとして、住居が「手近な材料でつくられる」ということと、「気候や生活様式に左右される」ということを使います。次に、接続的知識を使います。カリフォルニアは雨が少ない。大きな木が育ちません。雨が少ないことから日干しレンガみたいな材料はつくりやすいですよ。では平原ではどうかというところ、ここではバッファローを追う生活をしています。そうすると、移動が楽であることが、家をつくる時に大事になってきます。そこで、ティーピーと呼ばれるテントで、バッファローを追って移動しやすいような家に住んでいる、これですんなりとつながってきます。

こういう知識を使うことなしにただ覚えておきなさいと言われたら、反復・丸暗記するしかありませんでした。「北西海岸では杉の板でできた斜め屋根の家」と、呪文じゅもんのように唱えてくり返すしかなかったのに比べて、このほうがずっと覚えやすくなるし、忘れにくいということになります。

(市川伸一『勉強法の科学』
いちかわしんいち)

(1) 左に示す「図 住居についてのつながりのある知識」は、本文を図式化したものです。空らんA～Dにあてはまるものを次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----------|---|-----------|---|------|---|-----------|
| ア | 雪が積もりにくい | イ | 家をつくる | ウ | アメリカ | エ | インディアンが住む |
| オ | 雨が少ない | カ | バッファローを追う | キ | 北西海岸 | ク | 材料が手に入る |

(2) 筆者は住居の例を用いて、どのようなことを伝えようとしていますか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 社会科の学習においては、反復・丸暗記するより図を書いて整理すると、理解がより深まりやすくなるということ。
- イ アメリカは国土が広く環境が複雑であるために、住居の形態はその地域、住民によって多種多様であるということ。
- ウ 意味や構造を見出すために接続的知識を使うと、ただくり返し覚えるだけの学習よりも理解が定着するということ。
- エ 新しく家を建てる時は、接続的知識を活用しながら、その地域の気候を調べる必要が大切であるということ。

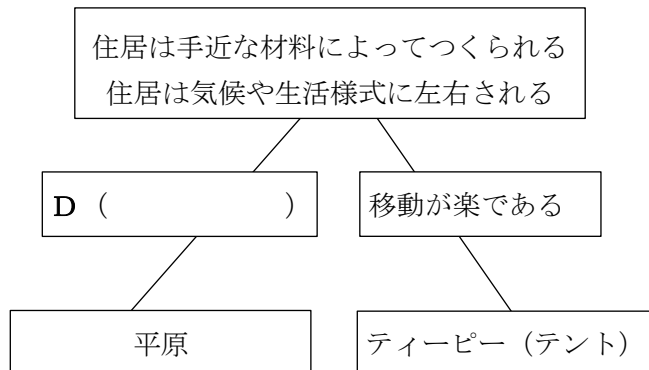
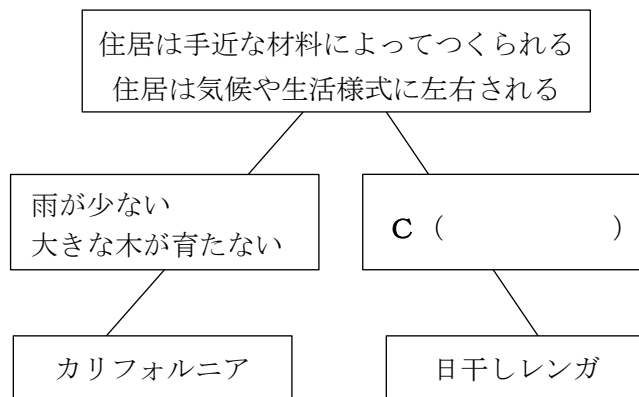
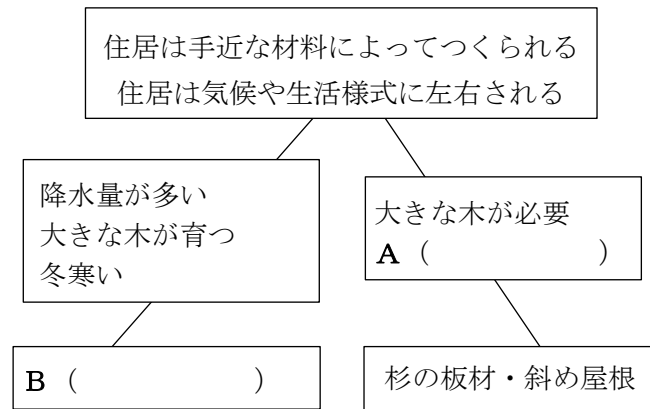


図 住居についてのつながりのある知識

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部省略しています。)

《車いすユーザーの少女・渡辺六花は、綾峰高校に通っている。四月下旬、伝統行事である「青嵐強歩(長距離歩行大会)」の開催に向け準備が進められている。六花はこの青嵐強歩に参加するつもりでいたが、同じ班のある女子生徒が六花に休んでほしいと思っていることを偶然に聞いてしまう。その後二日も学校を休む六花を心配した同級生の少年・荒谷伊澄は、自宅を訪ねてみる。》

「中二の時にいきなり病気になって、治療がうまくいったおかげで命は助かったけど、もう自分の足で歩くことはできないって言われた。それから私、すごく荒れたの。どうして私がこんな目に遭わなきゃいけないの、どうして私なの、って。小さい頃からミュージカルスターになりたくて、歌もダンスもがんばったし、演技の勉強もしてた。留学する時のために英語の勉強も自分でテキスト買って毎日したし、夢を認めてもらうために学校の勉強もがんばってた。でも、それが、ある日いきなり全部だめになっちゃった」

① 世界がいきなり裏返されたその日を思い出すように、六花は遠い目をした。

「あんまり苦しくて、死ぬほど腹が立って、いつも不安で頭がパンパンで、もうおかしくなりそう、それで私、母に当たったの。わがまま言って、怒鳴り散らして、傷つけることもたくさん言った。それでも平気だと思ってた。大人は傷ついたりしないし、お母さんはお母さんだから私が何を言っても何をしても受け止めてくれるって、本当に馬鹿だけど、思い込んだの。でもね、母はある日、心を壊して倒れちゃった」

何も、言葉が出てこない。気の利いた相づちを、② 六花に寄り添ってなぐさめる言葉をかけなければいけないのに、何ひとつ出てこない。

「私が歩けなくなったことで、苦しいのは私だけだと思ってた。でもそうじゃなくて、父も同じだけ苦しんでたし、母はもしかしたら私以上に苦しんでたかもしれない。それなのに、たくさんひどいこと言って、八つ当たりして、私は母の心をぼろぼろにしちゃった。母は私を責めたことは一度もないんだよ。受験勉強の時も助けてくれたし、今も毎朝駅まで送ってくれるし、雨が降れば迎えに来てくれて、夕ご飯も毎日作りに来てくれる。だけど、今でも、母は私と同じ家で暮らせない。それだけ、私はひどいことをした」

この期に及んでもまだ何も言えない伊澄に、六花は透きとおるように③ 微笑した。

「だから、これ以上私のせいで迷惑をかけたくないんだ」

「……迷惑とか、思っていないと思う。それは迷惑とは違ちがうんじゃないのか」

「どう違うの？私がいると、誰だれかが何かを負担しなきゃいけないくて、それを『嫌いやだな』って思う。火曜日の朝、あの人たちが言ったみたいに。あれは正しいよ。私は、どうしてもそうなっちゃうの。誰かの手を借りないと、助けてもらわないと、どうにもできない時がある。迷惑をかけなきゃそこにいられない時がある。でも——」
声が震えて、六花がうつむいた。

「本当は誰にも迷惑なんてかけたたくないよ、私だって。自分のことは全部自分でやって、好きな時に好きな場所に好きなように行きたい。段差も坂道も気にしないで階段しかないとこにも出かけていきたい。歌うたいたい。踊おどりたい。いろんな人を演じて大雨みたいな拍手をもらいたい、ステージの上で。毎日毎日そう思うの。本当の私に戻もどりたいって。だけど、もうどうしようもないから、今はこの私が本当の私なんだから、がんばろうって思うの。でも夜にはまた、どうして、戻もどりたいって——毎日、毎日、そのくり返し」

リビングにはレースのカーテンをかけた大きな窓があり、そこから射しこむ夕方のオレンジ色の光が、六花を照らしていた。頬ほおの輪郭りんかく線せんが淡あわくかがやき、繊細せんさいな産毛うぶげが光っている。うつむき加減のその姿が、とても深いかなしみを帯びている。

③ 何かを言わなければいけないと伊澄は口を開いたが、ただ息の音しか出てこなかった。

④ 『私ぶっちゃけ、そういう人たちにどうしてあげたらいいのか、わかんないの』

青嵐強歩に出るといふ六花を傷つけることなく諭さとしてくれと頼たのんだ女子生徒が、苦しそうにこぼした言葉を思い出す。今なら、彼女がああ言った気持ちがある。

六花がづらい気持ちでいる。それはわかるのに何も言葉が出ないのは、自分はきつと何もわかっていないという引け目があるからだ。良かれと思っかけてかけた言葉が実は見当はずれで、それによって六花を傷つけてしまうのではないかと怖こわいからだ。実際、自分は何もわかっていないのだと思う。本当は少しばかり六花を理解しているつもりでいた。けどたった今、六花が吐露とろしたことを聞いて、自分の「理解」なんてほんの表層をなでるくらいのものでしかなかったのだとわかった。自分にはわからない。六花の抱える苦しさが本当にはどんなものなのか、どれほどのものなのか。どんな言葉が彼女の心の真ん中に届き、どんな行動が本当の意味で彼女の助けとなるのか。情けないくらい、何も、わからない。

——だけど、わからないからといって、黙だまり込んだままではいられないのだ。

彼女が唇くちびるを噛かんで必死に耐たえている今この時に、何もできず、何も言えないのだとしたら、自分が今ここにいる意味なんてない。

「もし——現実はどうじゃないんだけど、それでも、もし俺われと渡辺さんが逆だったら。俺が車いすユーザーでも学校のめちやくちゃ歩くイベントに出た如果说言ったら、渡辺さんはそれ、迷惑すまみだっと思っう？」

うつぶわいていた六花が少しだけ顔を上げ、前髪すきまの隙間から赤くなつた目を向けた。

「……思わぬいよ。でもそれは、現実には私が車いすユーザーだからで、だからそれがどういいう気持ちかわかるから、迷惑すまみって思わぬだけの話だよ」

「確かにそうかも。現実には、俺は中学の時のけがも運よく治ふつうつた普通に歩いて百メートルもそこそこのタイム出せる健康者だし。けど、渡辺さんが青嵐強歩に出た如果说言っうことを、迷惑すまみとかわがまとは思わぬい。それはどうしてかっうと、俺が渡辺さんのこと、いくらか知っうからだと思っう。学級委員になるのを遠回しにやめとけっう言われた時、腹を立てたり責めたりするんじやなくて、これから自分のことをみんなに知っうもらえるようにがんばるっう渡辺さんは言っうた。あの時だけじやなくて、車いすを使っうている渡辺さんと、そうじやぬ俺たちが一緒にいる毎日の中で、俺たちに気を配っうて、でも自分の気持ちもしっかり声上げて伝えて、俺たちにとっても、渡辺さんにとっても、少しずっう何かが良くなるように努力してゐる。俺はそういっう、いっつも闘たたかつてゐる渡辺さんを知っうてゐるから。青嵐強歩のこと、イベントに出るか出ぬかだけの話じやなくて、そのもっうと向こうにあるものにつながる話なんだっう知っうてゐるから。だから俺は、迷惑すまみとかわがまなんて思わぬいんだと思っう。俺も何かを手伝いたいっうて、思っうんだと思っう」

⑥ 六花の目が時間をかけて大きく見開かれて、水まの膜まくを張り、ゆれた。だけど気丈きじょうな彼女は、こみあげたものをあふれさせることを良しとせず、ぐっうと口元と目に力を込める。

そんな意地いぢっ張りで、いっつも自分の力で立っうとする意志を捨すてぬい彼女が、好きだ。

「火曜日の朝に聞いたこと、やっぱり傷やつたと思っう。あの時は俺もろくなこと言えなくて、ずっうと引ひかかっうたままだっうた。でも、俺に渡辺さんのこと言っうてきたあの人たちも、渡辺さんが嫌きらいなわけじやぬい。『何かあっうた時に責任とれぬい』っうて言い方かたしてたけど、つまり、怖おそいんだよ。車いすユーザーが困まどつてたらどうすればいいのか、自分が良くなるのか、もしもの事態にはどうすればいいのか、どれもよくわかんぬいから、なんか怖おそい。自分がよくわかんぬいせいで相手を傷やつたり失敗しぱいしたりするんじやぬいかっうて怖おそい。だけど、逆にそれがわかんぬいば、怖おそくなくなると思っう。怖おそくなくなつた後、その次に来るのが『面倒めんどうだから関わりたくなぬい』とかだつたら、それはもう仕方ぬい。違ちがう人間同士なんだから全員とわかんぬい合あうのは無理だ。でもまだそうやっうて『仕方ぬい』っうて済すませる段階たんだいじやぬいと思っうから、まだ決めるのは待まちつて。俺に時間をもらいたい」

「……どうして？どうして、そんなにしてくれるの？」

幼げな表情で^㉒眉根^{まゆね}をよせる彼女に、どう言えばいいのか考える。^㉓頭の中に、胸の中に、名前のないまま咲いているものを、どんな言葉なら形にできるのか。

「初めて会った日……入学式の日、渡辺さん俺に『私は車いすじゃなくて人間です』ってめちゃくちゃ喧嘩腰に言ったけど」
「……失礼ね、別に喧嘩腰じゃなかったでしょ」

「あれから、なんか俺の世界、カラフルになったんだ」
今ふり返ればわかる。あの時までの自分の世界が、どれほど色褪^{いろあ}せていたか。

耳にイヤホンを突っこんで、ガンガン音楽を流して、外界から自分を閉ざしていた。速水^{はやみ}との一件以来、自分のまわりで何が起きようとどうでもいいとしか思えなかったし、情熱を注ぐことができるものも見つからず、何ひとつ本気にならないと^㉔斜^{しや}に構えながら、息苦しい一日一日をやり過^あぎすように生きていた。

あの時の自分には目に映るもの全部がモノクロ映画みたいに色褪^あせていて、でもだから、毅然^{きぜん}と顔を上げて自分自身であるために闘う彼女が、とても色あざやかに見えた。

「前の俺は『あんた車いすなのに』って深く考えずに言うようなやつだったけど、今は、トイレのドアが内側に開くタイプだったりすると『これ車いすユーザーってどうするんだろ』って思ったりする。そういう風に、自分とは違う、いろんな人がこの世界にはいるってことを、前よりも少しだけよく知ってる。前までは自分のしよんとすることが邪魔^{じゃま}されるとすぐにイラッとしてたけど、今は、いろんな違う人たちが共同生活してるんだからそういうこともあるなって思う。俺、前の俺よりもまるくなっただし、人間が好きになっると思う。それで俺は、今の俺のほうが好きなんだ」

「——そういうのは、荒谷くんが自分で変わったからだよ。別に私、何もしてない」

「渡辺さんは何もしてないつもりかもしれない。でもやっぱり、渡辺さんに会ってなかったら、今の俺はこうじゃなかった」
変わるきっかけを与えてくれたのは、まぎれもなく彼女だ。

「俺は渡辺さんからもらったものがある。だから、今度は俺が渡辺さんにそれを返したい」

六花の黒目の下に透명한水がふくらんで、頬に光のすじを描きながら流れ落ちた。

(中略)

「……月曜日は、ちゃんと学校に行くから」

見送りに玄関^{げんかん}まで出てきた六花は、小さな声で言った。明日の金曜日は祝日だから、次に学校が始まるのは五月初頭の月曜日だ。六花の表情は注射の順番待ちをしている子供みたいに不安と緊張^{きんちやう}をおびていたが、それでも、行くと言ったなら彼女は必ず来るだろう。「わかった、待ってる」

だから伊澄も、それだけ答えた。それだけ答えたことがよかったみたいで、六花は少しやわらいだ表情でほほえんだ。学校の授業では教えてもらえないことを知っていく。まったく違う人間と人間がともに暮らしていく時、そこにはどうしても、闘わなければいけない時が来るのだということ。

それは相手を論破して打ちのめして再起不能にさせるための闘いではない。

おまえはこうなのだろう、だからこうあるべきだろう、と自覚も悪意もなく押しつけられるものに、そうではないのだと声を上げる闘い。大事にするものも譲^{ゆず}れないものもまるで違う人間同士が、たとえ心底理解し合うことはできなくとも、せめて認め合うための闘い。

扉^{とびら}を閉ざされ、それでも窓を探す彼女が、^⑤彼女であり続けるための闘い。

考えよう。そんな彼女に、自分は何をできるのか。

五月最初の月曜日。いつもの電車の四両目に乗りこんだ伊澄は、まだそれほど混雑していない車両の中を歩いて、一両目に移動した。車両の奥に設えられた車いす用スペースに、制服のブレザー姿の六花がいた。声をかけたが反応がなく、よく見てみると、シートへアーからのぞく耳にワイヤレスイヤホンがはまっていた。トン、と指で肩^{かた}を軽く叩^{たた}くと、ぱっと六花はふり向いて、左耳のイヤホンを外した。

「……おはよう」

「おはよ。何聴^きいてんの？」

「^⑥何年か前に公開されたミュージカル映画の歌。聞いてると勇気が湧^わいてくる気がして、大好きなの。あんまり好きで、この曲聴くために十回も映画館行ったの」

「へー……どんな曲？」

「ちょっと『普通』から外れた、はみだし者の人たちが、自分をつらぬくために歌う曲。これが自分だ、って誇^{ほこ}り高く歌うの」

伊澄が聴くのはたいていロックでミュージカルは守備範囲外なのだが、興味をひかれて「へー」と六花のイヤホンを見ていたら、六花が控えめに言った。

「……聴いてみる？」

さし出された片方のワイヤレスイヤホンと六花の顔を十秒くらい交互に見てしまっただけから、伊澄はそれを自分の左耳に差し込んだ。六花がスマホを操作すると、ピアノの前奏が始まった。きれいでピュアで、少し心もとなくすらある雰囲気。次に始まった女性の英語の歌声も、暗がりですさやくように儂げだった。

けれど次第に歌声はバックコーラスも加わって、高らかに、力強くなっていく。これが自分と何度もくり返しながら、普通からこぼれ落ちた人々が誇り高く行進していく姿が見えるようだった。歌声に耳をすましているだけで、自分も勇気を与えられる気分になる。

本当は、六花が心配でこっちの車両まで歩いてきたのだ。不安そうだったり、元気がないようだったら六花を励まそうと思っていた。ひとりじゃないから大丈夫だと言おうと思っていた。だけど、そんな必要はなかった。歌を聴きながら窓を見つめる六花は、真摯な横顔をしている。不安も恐れもあるのかもしれない。それでも六花はことさら力むこともなく、殺気立つわけでもなく、覚悟を決めた目をしている。

「……神様は扉を閉める時、別のどこかで窓を開けてくれるって」

まわりの乗客の耳障りにならない程度の声を出すと、六花がこちらに顔を向けた。イヤホンは片方ずつ分けて合っているから、歌を聴きながらもお互いの声は聞こえる。

「渡辺さんに聞いてから、俺も何か探そうって思ったんだ。中学までは俺の扉は走ることで、それは俺が自分でだめにしたけど、別のものがあるなら探してみようって、そう思って」

「……うん」

「まだ見つかったわけじゃないけど、とりあえず全部本気でやってみようって、今思った」

六花は、なんとか理解しようとする努力はしたのだがやっぱりおまえの言うことがちっともわからない、という心情がものすごく伝わる表情を浮かべた。さすがはミュージカルスターになるために演技の勉強を積んできただけはある。

「意味がわからないよ」

「うん。わかんなくていい」

綾峰高校に入学が決まった時に決めたのだ。これからは何にも本気にならないと。クーリングダウンのジョグみたいに、何も目指さず、適当に毎日を流して生きていこうと。そうすればもう、走ることにのめり込むあまりに全部を台無しにしたような過ちをくり返すことはない。

でもそれは結局のところ、もう傷つきの嫌だったのだ。斜に構えて何もかもどうでもいいと言っていれば、いつか何かを失う時が来ても、たいした痛みを感じずにすむから。

⑦ だけどそれは違うんだと、今は思う。どんなふうにも生きてたとしても、失うことから、傷つくことから、痛むことから、たぶん逃げることはできない。

けれど、精いっぱいのかと誠意を尽くすことは、たとえ骨身に食いこむ痛みを負うことになっても、きつと何かを残す。それはすぐに目に見えて手にとることのできる結果ではないかもしれない。だがほんの少しだけ先に続く希望のようなものが残るはずだと、今は思う。

だから自分にできることをやってみよう。もう一度、本気で。

(「青春と読書2022年4月号」所収、阿部暁子『カラフル』)

問一 —— 線部①「世界がいきなり裏返されたその日を思い出すように、六花は遠い目をした」とありますが、どういうことですか。

最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 病気によって生活が大きく変化してしまったことで、思いがけない苦しみやいら立ち、また不安におそわれた思いを母親にぶつけてしまったが、その日々のことをひどく反省しているということ。

イ 病気によって車いす生活にならざるを得なくなってしまう悲しいことも続いたが、家族をはじめ、自分の身のまわりにいる多くの人たちに助けられてきたことに感謝の思いを感じているということ。

ウ 病気によって自力歩行ができなくなってしまい、それまでミュージカルスターになる夢のために努力してきた日々の生活が一変してしまったことへの思いをはせているということ。

エ 病気によって自力歩行ができなくなってしまいう前の、ミュージカルスターを目指し、様々な技能の習得に努力しながら、学校の勉強にも励んでいた日々を懐かしんでいるということ。

問二 ——線部②「六花に寄り添ってなぐさめる言葉をかけなければいけないのに、何ひとつ出てこない」の部分や、——線部③「何かを言わなければいけないと伊澄は口を開いたが、ただ息の音しか出てこなかった」の部分では、伊澄が六花に声をかけられないことが示されていますが、その理由として**ふさわしくないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 六花が自分自身のことや周囲の人たちとの関係のことで苦しんでいる本質的な痛みを、伊澄は十分に理解できているわけではないと感じているから。

イ 六花が車いすユーザーにならなければならなかった苦しみを理解しつつも、伊澄は母親が家族として六花の繊細な気持ち^{せんさい}を適切に受けとめてほしかったとも感じているから。

ウ 伊澄は六花が抱えている苦しい心情に寄り添う言葉をかけたいと思うが、その言葉は六花の心情からは遠く、むしろ六花を傷つけてしまわないかと恐れているから。

エ 伊澄は六花を理解しているつもりでいたが、実は表層上の理解にすぎないのではないかと思ったり、また六花を手助けするための行動に思い悩んだりしているから。

問三 ——線部④「『私ぶっちゃけ、そういう人たちにどうしてあげたらいいのか、わかんないの』とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 率直に言えば、車いすユーザーの障害者が健常者主体の行事に出場するのは迷惑^{めいわく}になるので参加をやめてもらいたいが、どのような言葉で言えばいいかわからないということ。

イ 正直に言えば、様々な困難に向き合わざるを得ない人生に同情できると言う人の言葉は、うそがまぎれていることもあるので、判断できるかどうかかわからないということ。

ウ 秘密をさらけ出して言うならば、他者への想像力には限界があり、実際に自分が体験していないことはまるで理解することができなくてわからないということ。

エ 包み隠さず^{かく}に言えば、障害を持った人たちの気持ちをそこなうことなく物事を考え対応していきたいが、その向き合い方がわからないということ。

問四 ——線部⑤「彼女であり続けるための闘い」とありますが、「伊澄」が感心する「六花」の「闘い」として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 理解を欠いた指摘に対して、感情的な非難で問題を解決することを目指し、自分の意思が正しく伝わり理解してもらえようように努力していること。

イ 不合理な考えによって自分の考えが正しく理解されないような場合は、相手の矛盾する点を指摘して、誤った理屈が立ちいかないように努力していること。

ウ 日々生活する中で、周囲の人たちが発する声をしっかり受け止め、自分が大切にしている思いや考えは二の次にするように努力していること。

エ 大切にしているものや譲れないものが異なる人間どうしであっても、対立のままにせず少しでも認め合い、物事が少しずつでも良くなるように努力していること。

問五 ——線部⑥「何年前前に公開されたミュージカル映画の歌」とありますが、六花と伊澄は、この曲をどのように聴いていますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 六花は勇気が湧き何度も映画館へ足を運ぶほど元気があった日々を思い出し、懐かしむようにこの曲を聴いている。一方、伊澄はよく聴くロックの魅力とは異なるが、ミュージカル音楽のジャンルにも新たな魅力を感じ、好みにしようと聴いている。

イ 六花は車いすユーザーとして臆することなく自分らしい生き方をしようとすることを、この曲に重ね合わせて聴いている。また、伊澄は懸命に人としての誇りを大切にしようとする純真な六花の姿を、この曲から見出して聴いている。

ウ 六花は車いすユーザーとして、日常生活で感じる暗い思いをはねのけてくれる誇り高い曲として聴いている。他方、伊澄も「青嵐強歩」の参加をめぐってもめていた問題を吹き飛ばす気持ちにさせる力強い曲調に喜びを感じて聴いている。

エ 六花は映画で描かれている者たちが誇り高く歌う姿に、ミュージカルを目指していた自分を反映させて聴いている。そして、伊澄はそんな六花が身体の障害を乗り越え、再びミュージカルを目指せることを高らかな気持ちで確信しながら聴いている。

問六 ——線部⑦「だけどそれは違うんだと、今は思う」とありますが、伊澄のこれまでの心情から「今」の心情への変化について、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア これまでは高校入学から決めたようにあらゆることに本気にならず、自分が取り組んでいたことを台無しにする過ちをおこさないことを決意する思いだった。しかし、今は前向きな六花の姿に感化され、走る能力に代わる別の能力を夢中で探すことができれば、痛みを超えた先にある希望を手に行ける思いでいる。

イ これまでは百メートルのタイムもそこそこに出せるなど、健常者としての能力を最大限高めようとするだけで目に向く思いだった。けれども、今は車いすユーザーとして障害のある人たちの日常生活の困難にも関心を持つことができるようになり、前よりも人間が好きになっていることを実感する思いでいる。

ウ これまでは何かを失ったときの痛みを感じないように、何事も正面から向き合うことはせずに、流れに身を任せて生きていこうとする思いだった。しかし、今は何かに精いっぱい取り組んだことが報われず痛みを負うことになったとしても、本気で向き合うことの意味を必死で見出そうとする思いでいる。

エ これまでは車いすユーザーの六花が経験し苦労してきた姿を知ること、少しでもそばにいて助けてあげようとするなど、他者への愛を惜しまない思いだった。けれども、今は何かを失うことや傷つくことや痛むことを考える前に、自己をまず考えの中心に置き、できることに本気で取り組もうとする思いでいる。

問七 この物語の表現や内容の説明として、ふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ──線部㉑「微苦笑」や、㉒「眉根をよせる」や、㉓「斜に構える」などの、日ごろ青少年では使わない言葉をあえて用いることで、大人に向かう時期の複雑な心情を持つ六花や伊澄に対して、読者が自分のことのように感情移入できるように表現している。

イ ──線部㉔「六花の目が時間をかけて大きく見開かれて、水の膜を張り、ゆれた」という部分は、六花を思う伊澄の思いがじわりと心に届き涙となりながらも、緩やかに瞳を覆う様子として、繊細な情感を詩的に表現している。

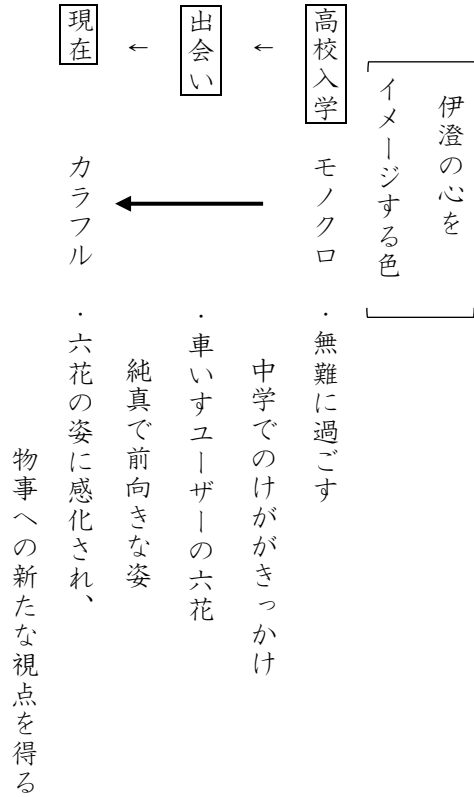
ウ ──線部㉕「頭の中に、胸の中に、名前のないまま咲いているもの」という部分は、どうして自分のことを親身になって考えてくれるのかわからないとと思っている六花に対して、明確な理屈では説明しきれないでいる伊澄の思いを、比喻の一種を用いて表現している。

エ 伊澄の心中や会話で繰り返される「扉」の言葉は、同様に繰り返される「窓」の言葉と対比して用いられている。この「窓」の言葉は、自分や六花のこれからの夢や希望と深く関係のあるものとして置き換えられて表現されている。

問八 この物語の読み取りを表したものととして、最もふさわしいものを次のア・イ・ウから選び、記号で答えなさい。

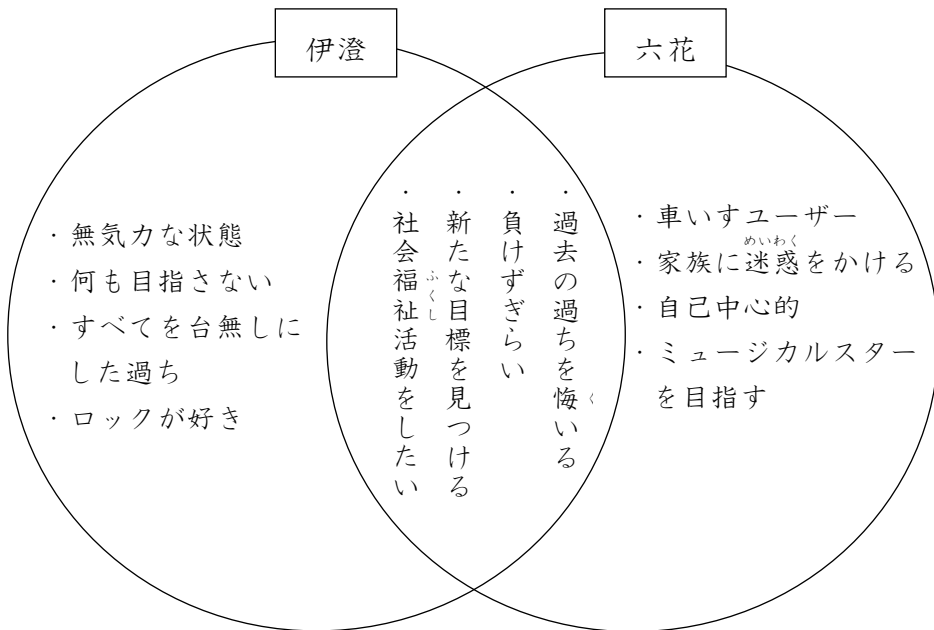
ア 変容型

*登場人物の伊澄は、変わった？



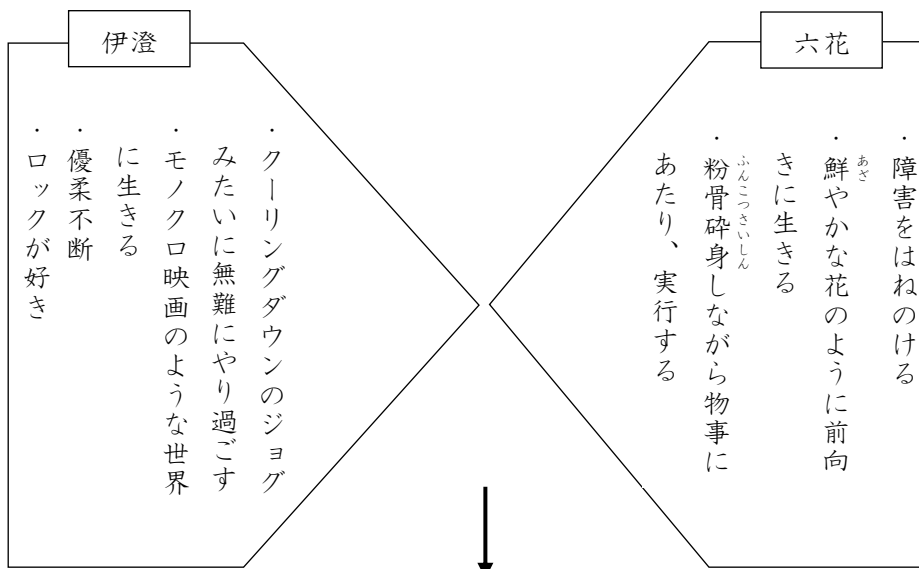
イ ベン図型

*登場人物の六花と伊澄の共通点は？



ウ 対比型

*登場人物の六花と伊澄の^{ちが}違いは？



せつさたくま
切磋琢磨するよきライバルとして
高校生活を過ごす

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部省略しています。)

《筆者はロボットの研究者である。様々な研究では、ロボットの一種であるアンドロイドが登場する演劇も活用している。》

心とは？

さて、では心とはいったい何であろうか？心の仕組みをいっさい持たないロボットやアンドロイドにも、演劇の中では、人間の役者に匹敵する^{ひたひた}か、または、それ以上の心を感じることができるといえる。そうしたことから考えると、^①その仕組みの問題ではないようである。脳や体の中に仕組みがあるから、相手が心を感じるのではなく、

〈人間には相手の発話や行動から、相手に心があると感じるという機能がある〉

と考えたほうが、つじつまが合う。

人間どうしの関わりの場合、^②相手に心があると互^{たが}いに感じることをすることができる。自分自身が心の機能を持っているか、自分の中に心があるかどうか解からないが、相手には心があるように感じられる。人間どうしの関わり合いでは、「あなたには心があるように思う」と互いに心の存在を認め合うことになり、それゆえに、自分自身に心があるように思っているのではないだろうか。

a

こうなると、アンドロイド演劇を見て、アンドロイドの役者にも人間の役者にも心を感じ、アンドロイドの役者にも人間の役者にも、心があると考えるもよさそうである。

1、アンドロイドと人間の違^{ちが}いは、アンドロイドは、人間に心があるように感じさせることができても、アンドロイド自身人間との関わりを通して、人間に心があると感じることをできないことである。

アンドロイドは演技として、人間との関わりにおいて、「人間のあなたの行動から、あなたに心があるように感じられます」と話させ、相手の人間に心の存在を感じさせることは可能である。しかし、アンドロイドが本当にそのように感じることは可能なのだろうか？

私は、近い将来、アンドロイドが人の発言や行動に心を感じるようになることは、可能になると想像している。

相手に心を感じる仕組みというのは、何か複雑な論理的な思考を巡^{めぐ}らせて感じるものではなく、夕日を見て感動するように何か理由が解からないけれども、感動してしまうというようなものだと考えている。夕日を見て感動する人間の機能は、現象的意識や^{*1}クオリ

アと呼ばれることがある。この現象的意識は、どのような仕組みで作られているのであろうか。少なくともそれは脳の機能であって、神経回路で構成されているものであることは間違いないだろう。ならば、あとは、その神経回路をコンピュータで再現することができるが、ロボットは現象的意識を持ち、相手に心を感じることができるようになる。

この現象的意識を作り出す神経回路は、近年盛んに研究されている。^{*2}ディープラーニングで再現できる可能性がある。夕日に感動したり、相手に心を感じたりすることとは、人間が人間社会で生きてゆくうえで、非常に重要なことである。だからこそ、人と美しいものを共有したり、共感したり、適切な人間関係を築くことができる。

このような機能を、人間は長い進化の過程で獲得してきた可能性がある。多くの経験から、夕日を見たら感動し、人間には心を感じるといふ神経回路はまさに、ディープラーニングで人工的な神経回路が、入力情報と出力情報を結びつけるのと同様に、学習してきたのではないだろうか。その理由は、考えてみても解からない。でも感じてしまう。そのことはすなわち、

〈夕日を見たら感動し、^③ 人に心を感じるといふ神経回路がある〉

ということの意味している。

現在、研究室ではこのような神経回路の構成をめざして、まずはきれいなものに反応する人工的な神経回路を構成することを試みている。あらゆるきれいな画像と、そうではない画像を入力して、何かを見たときに「きれいだ」と反応する神経回路をディープラーニングで造ろうとしている。人間の場合は、そのような神経回路が遺伝的にも引き継がれながら、また、生まれた後の経験も用いて、適切に反応するようにトレーニングされていると、私たちは考えている。

これまでの議論を踏まえて、再度、心とは何かという質問に答えるなら、

〈心とは、その存在を互いの **2** を見て感じ合う、 **3** によってもたらされるもの〉

ということになる。この仮説が正しいかどうかを確かめるには、実際にこの仮説にもとづいて心を持つロボットを開発し、そのロボットとの関わりで、人間が互いに心を持つと確信する必要があるのだが、そうした実験が近い将来できることを期待している。

この心に関する議論は、おそらく魂たましいや命にもあてはまる。魂や命も心と同様に、人間にとっては非常に重要で、多くの人がその存在を信じているが、実際にどのような仕組みが、魂や命を司つかさどっているのかは明らかになっていない。命でさえも、その定義はまだまだ曖昧なままである。心臓死が死なのか？ 脳死が死なのか？ 脳死はどこまで脳が死ねば死なのか？ その脳がコンピュータつなと繋がっている場合はどうなのか？ 命についても、生と死の境界について改めて考えると、それがいかに曖昧であるかが解かる。

心は、相手にあると感じるものであるという話しをしたが、魂や命も現時点では、^④ そういった心と同じようなものかもしれない。

(中略)

未来を考える力

私は研究者だが、研究者にとって、おそらく研究者以外の者にとっても、未来のことを考えることは大事である。しかし^⑤ 勘違いしてはいけないのは、未来には必ず幸せがやってくると何も考えずに信じることだ。もし常に未来が幸せなら、過去は未来に比べて不幸だったのかということになる。平安時代は今に比べてものすごく不幸だったのだろうか？ 決してそんなことはない。

幸せとは相対的な価値観であって、過去にも未来にも、幸せも不幸もある。幸せがずっと続けば、それは言わば当たり前になり、ときには幸せでなくなるとともに、少しの不幸が大きな不幸に感じるようになる。大事なことには、未来は幸せにならないかもしれないけれど、それでも未来に向かって人間は生きていくということである。

そうになると、人間は幸せになるために生きていくのではなく、何か別の目的があるか、目的のないままに生きていくことになる。何の目的もなく、ただひたすらに生きる。本来人間はそうした生き物だったに違いない。動物を見れば、ただひたすらに生きていくように見える。しかし、未来を予測する力を持った人間にとって、未来を考えずに今をただひたすらに生きるということは、もはや難しい。未来について考え、そこから自分がすべきことを考えることで、今自分が生きる意味を感じながら生きることができる。

未来を考える力を持ったがゆえに、未来について期待が持てなくなったとき、人間は動物よりもろく、生きる力を失ってしまう。そこに人間の悲しい性さががあるように思う。

(中略)

ロボットを通して人間を考える

⑥ 自分が思い描いた未来である「ロボット社会」を実現して、何をしたいのか。単にロボットがたくさん活躍する社会を創りたいのか。そうではなく、私が創りたいロボット社会とは、ロボットとの関わりを通して人間について多くを学べる社会である。

人間と関わるロボットを開発するには、人間について深い知識が必要になる。そして開発したロボットと人間との関わりを観察すれば、そのロボットがどれほど人間に近づいたか知ることができる。

c ゆえに、人間と関わるロボットを実現するというのは、人間そのものをロボットの技術で創り上げるということでもある。

このように、私が創りたいロボット社会を実現するためには、人間について深く理解する必要がある、人間に対する深い興味がなければならぬ。

思い返せば、私自身、小さいころから気にかけていたのは、自分とは何か、人間とは何かという問題である。小学五年生くらいに、大人に「人の気持ちを考えなさい」と言われたことがある。そう言われて、何をどうしていいか解からず、逆にその意味を知っている大人はすごく偉いと思った。

「気持ち」とは何か、具体的にどんなものを指すのか。「考える」とは、どうすることなのか。単に記憶することでも、計算することでもないはずだ。

むしろ、この小学五年生の疑問に対する答えは今も得られていない。「気持ち」や「考える」というものは、非常に理解が難しいことである。そしてもっと難しいのが「人」の理解である。「人の気持ちを考えなさい」とは何をどうすることなのか、今でも疑問のままに残っている。

しかし、この疑問こそが人間にとって最も重要な疑問なのだと思う。夢とは何か、生きる目的とは何か、そういったことがはっきりしないままに、目の前のことに組みながら生きてきた。ただ、小学五年生以来、人間や自分に関する様々な疑問が沸き起こっては、生活に紛れて消えることを繰り返していた。そして、そうした疑問が研究を続ける中で、徐々に明確になり、自分の解くべき問題、創るべき社会のイメージが明らかになってきた。

私が創りたい社会とは、自分を映し出し、人間とは何かを考えるヒントをたくさん与えてくれるロボットが身の周りで活動する社会、ロボットを通して自分たち人間の存在について深く考えることができる社会である。

ただ、⑦この人間理解にはゴールがない。人間理解はほとんどの科学技術の目的であるように、最も難しく、最も重要な問題であるとともに、質が悪いのはこの問題の答えは常に変化するということである。

人間の「定義」は科学技術の進歩とともに、少しずつ変化してきた。今後も科学技術の進歩や社会の変化に伴い、その「定義」は変わっていく。それゆえ、理解したと思っても次の瞬間変化し、また疑問が膨らむ。それでも私たち人間は、人間理解をやめないだろうと思う。

未来は可能性に満ちている

「そうした人間の未来は、人間にとって幸せなものになるのだろうか。

先にも述べたように、幸せとは相対的な価値観であって、過去にも未来にも、幸せも不幸もある。幸せがずっと続けばそれは言わば当たり前になり、幸せでなくなる。ゆえに、未来において幸せは保証されない。

しかし、その中で、多様性は重要だと思う。

もし未来が一つだったら、それを幸せと思う人にとってはいいことだが、それも変化しなければ、幸せはすぐに薄れていく。未来がどうあるべきかと考えれば、いくつもの価値観を受け入れてくれる多様性があることだろうと思う。

多様性で思い出されるのは、動物や人間の進化である。未来に向けてよりよい形態に自らを変えていく進化は、未来を予測しているわけではない、多様な個体をたくさん生み出し、そのうち偶然環境に適応したものだけが生き延びる。4、個体が学んだことが社会の中で引き継がれて、よりよい個体が生まれていくということもあるだろう。しかし、多様性を失ってしまったら、進化は難しい。

では、ロボットの技術は、ひいては科学技術一般は、未来において多様性を生み出すのだろうか。私の答えはYESである。

科学技術は特に人間について、その可能性をどんどんと拡げてきた。人間は科学技術を取り込むことによって、膨大な情報を扱えるようになり、また秀でた身体能力を持てるようになった。

スマートフォンを使えば、いつでもどこでも世界中に散らばる情報にアクセスできるとともに、自分の記憶能力を代行させることもできる。自動車や飛行機を使えば、走るよりもはるかに速く別の場所に移動できる。

今は、優れた人工義肢が開発され、身体能力はときに「健常者」を上回ることもある。パラリンピックの選手のプレイをみれば、その凄さに感動することも多い。

人間は「完全な肉体」を持つことが必要かと問われれば、今はYESという人はほとんどいないだろう。義手や義足、人工骨、人工臓器などを使っている人は、ますます増えている。技術は、人間の可能性を拡張、多様性をもたらしてきているのである。

肉体が人間の要件にないなら、人間は未来においてさらに多様性を拡張する可能性がある。人間の肉体という制約に縛られずに、自由に身体や感覚器や脳の機能を拡張することができる。

このようにして、私たち人間は科学技術を取り込みながら、多様性を増し、さらに進化していく。未来は幸せかどうか解からないが、いろいろな可能性に満ちていることは間違いなく、その可能性は科学技術によって、さらに拡張されていく。

どのような人間に進化したいのか、人間一人ひとりが思い描く未来のすべてが可能性としてある。多様性を生み出す科学技術を発展させながら、それぞれがなりたいたい未来の人間を思い描きながら、人間の可能性を探究し、人間を理解しようとしている。いまのところ、これが人間として生きることの意味だと思う。」

(石黒 浩 『ロボットと人間 人とは何か』)

(注) *1 クオリア……意識的、主観的に感じたり経験したりする「質」のことを指すと言われている。

*2 ディープラーニング……データの^{とくちょう}特徴をより深く学習し、複雑な処理ができるようになること。

問一 次の文は、本文中の **a** **d** のどこにあてはまりますか。記号で答えなさい。

人間は、人間と関わるための脳の機能や体を持っている。

問二 ——線部①「その仕組みの問題ではない」とありますが、

(1) どういうことですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 演劇では人間の役者が心をこめたセリフや行動をとれば、相手役のアンドロイドに心の仕組みがなくても思いは伝わるといふこと。

イ 心の仕組みがなくても、演劇に登場するアンドロイドのセリフや動きを人間が制御^{せいぎ}することで、演劇は成立するといふこと。

ウ 相手に心を感じるというのは、脳や体の中に感情や意識にかかわる複雑な仕組みに係^かっているわけではないといふこと。

エ 心は自分と相手がお互いを思いやる発言や行動をしたときの空間に生じるもので、脳や体に存在するかどうかは問題ではないといふこと。

(2) 筆者がこう考えたのは、アンドロイド演劇がどのような様子だったからだと思像できますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 演劇に出演するアンドロイドが人間の役者に向かって、「友達になれてうれしい」と語った。

イ 演劇に出演するアンドロイドが読み上げる詩の朗読に、多くの観客が心を動かして涙を流した。

ウ 演劇に出演する人間の役者がアンドロイドの歌う表現にあわせて、感情豊かに歌い返した。

エ 演劇に出演する人間の役者が公演ごとに演技を変えても、アンドロイドは的確に役を演じた。

問三 — 線部②「相手に心があると互いに感じる事ができる」とありますが、

(1) このことについての説明として、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、私たち人間はそれぞれ自分に心があるかどうかをはっきり意識して生活しているわけではないのだろうと、自身の体験をもとに結論づけている。

イ 筆者は、私たち人間は自分自身に心が存在しているように感じているが、じつは錯覚であるのにそのことに気がついていないのだという証拠を述べている。

ウ 筆者は、私たち人間はある種の条件を満たせば、関わり合う相手に思いを届けることができる心の仕組みがあるのではないだろうかとという仮説を述べている。

エ 筆者は、私たち人間はお互いの関係で相手の心の存在を認め合うから、自分自身にも心があるように思っているのではないだろうかと推論している。

(2) このことの具体例として考えられる最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 公演途中で私はチェロの音を外してしまいとても悲しかったが、他のメンバーは私のミスを補いながら高い技術力で演奏を終えた。

イ 友達のゆりさんから「誕生日おめでとう！」と言葉をかけられ、その優しい気持ちがあうれしくて、ありがとうと笑顔でこたえた。

ウ 「ハイ、メルセデス」とクルマに呼びかけ駅の名を告げると、すぐに道案内をしてくれたので、その便利な機能にわくわくした。

エ 藤沢市で募集していた湘南海岸の清掃ボランティアに妹と参加してみたが、その有意義な活動に私は充実した気持ちになった。

問四 1・4 にあてはまる言葉として最もふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア そして イ また ウ おろん エ つまり
オ すなわち カ ただ キ いわば

問五 ——— 線部③ 「人に心を感じるといふ神経回路がある」とありますが、人間にこのような神経回路があることでもたらされること

はどのようなことですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間どうしお互いに様々な意見や考えを分かち合うことができる中で、適切な関係を作り上げることが可能であること。
イ タ日を見たときに感動するように、美に対する反応が細やかになり、社会生活で重要な美的感覚を築くことが可能であること。
ウ 社会生活全般にかかわる入力情報と出力情報の結びつきに作用するため、健康的で躍動的な人生を歩むことが可能であること。
エ 現象的意識やクオリアが生み出されることに関係し、自分は他者から愛されているという幸福感を得ることが可能であること。

問六 2・3 にあてはまる言葉として最もふさわしい組み合わせを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 2・表情や動作 3・経験
イ 2・言葉や表情 3・ディープラーニング
ウ 2・魂たましいや命 3・遺伝
エ 2・思考や意識 3・人間関係
オ 2・発話や動作 3・神経回路

問七 ——線部④「そういった心と同じようなもの」とありますが、どういことですか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 心と同様に魂や命も、それがどのようなものであるかを判然と定義することはできないが、人間にはとても重要なものであり、その存在はお互いの関係の中で感じられるものであるということ。

イ 心と同じように魂や命が自分自身に存在しているかどうかを確信することはできないが、他者にあると感じることは間違いないので、その仕組みを説明することで心を説明することができるということ。

ウ 生と死の境界がどこにあるのかが曖昧のままである魂や命はその定義も判然としないが、今後研究を重ねていけば、心と同じように魂や命を持つロボットを開発することができるということ。

エ 魂や命は人間に存在するものであり、事故や病気など何らかの要因によって機能が停止すれば死にいたるものであるが、心も人間の生死にかかわる点で同じであるということ。

問八 ——線部⑤「勘違いしてはいけない」とありますが、

(1) 筆者はなぜこのように言うのですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 何も考えずに未来には必ず幸せがやってくるものと信じてしまうと、人間が引き起こしてしまった過去の失敗を簡単に忘れてしまい、正しい歴史認識ができなくなってしまうおそれがあるから。

イ 未来が今よりも幸せになるかどうかは、相対的な価値観によって変わるものであるのに、そのことを十分に考えることなく幸せは必ず到来するものであると思ってしまうおそれがあるから。

ウ 幸せとは相対的な価値観でその感じ方が変わるものであるので、幸せがずっと続けば当たり前となるが、不幸が続いてしまうと人は生きるのが難しくなってしまうおそれがあるから。

エ 本来人間は多くの動物たちと同じように何か特別な目的のために生きているわけではないのに、悲しい性のせいで、今自分が生きていく意味を考えて生きようとしてしまうおそれがあるから。

(2)では「勘違い」をせずに、どのようなことが必要であると言えるでしょうか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 平安時代が今と比べて不幸であったわけではなかったことを改めて検証し、これからの未来を築いていくには、過去の歴史に目を向け、相対的な考え方を大切にしていくことが必要である。

イ 人間の幸せや心の仕組みを考えながら、未来にはどのような価値が社会に生まれてくるのかを予測する能力を高め、少しでも今まで以上に幸せな生活にしていくことが必要である。

ウ 未来が幸せになるとは限らないが、将来がどのようなかを考えていく中で、自分のなすべきことを考え、生きる意味を感じながら生きていくことが必要である。

エ これからの未来が幸せになるわけではないという事実から目をそむけず、人間は動物よりもろく簡単に生きる力を失ってしまふという前提に立つことが何よりも必要である。

問九 ———線部⑥「自分が思い描いた未来である『ロボット社会』とありますが、筆者が思い描くのはどのような社会ですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間についての深い知識を記憶きおくさせて開発したロボットが、社会の変化に伴いながら、無自覚の人間に向けて人はなぜ存在するのかを教えてくれる社会。

イ 多くのロボットが人間の能力だけでは取り組むことができない場面や分野で活躍し、あくまでも人間の補佐的役割を担っている社会。

ウ 人間が備える脳の機能や身体的能力の仕組みを人間から多くを学び取り反映されたロボットが、自立した意思を持って存在している社会。

エ 人間そのものが反映されたロボットが身近で活躍し、人間とはどのようなものであるのかという存在意義を考えることができる社会。

問十 ——線部⑦「この人間理解にはゴールがない」とありますが、そう言えるのはどうしてですか。筆者の考え方は異なるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間の存在について考えることは、重要で難しい問題であるばかりでなく、科学技術や社会の変化に応じて、「人間」とは何であるかということも変化していくから。

イ 例えば魂や命について考えた場合、脳がコンピュータとつながった状態をどう捉えるかなど、人間にとっての「生」のあり方や考え方は変化していく可能性があるから。

ウ 将来の夢や生きる目的が何であるのかという問題は、様々に変化するものであるので、だれもが常に明確な答えを出せるものではないから。

エ 人間の定義は何であるのかという問題は、科学技術の進歩や社会の変化に伴い変わり続けているため、ただ疑問が膨らむだけで有益ではないから。

問十一 「」の文章に述べられている筆者の考え方として、正しいものは「○」で、正しくないものは「×」で答えなさい。なお、すべて同じ答えにはしてはいけません。

ア 筆者は、幸せとは相対的な価値観によるものであるため、人間の未来が確実に人間にとって幸せであるかどうかは、人間が今後どのように感覚器官や脳の機能を発展させることができるかに大きく関わっていると考えている。

イ 筆者は、人は科学技術を発展させることで膨大な情報が扱えたり、輸送機器を発展させ速く遠くまで移動することが可能になったり、また人工義肢や人工臓器などによって完全な肉体を持つことができるようになったりしたと考えている。

ウ 筆者は、未来を考える上で大切なことは、複数の価値観を受け入れる多様性を拡張させていくことであり、科学技術を取りこみながら、その多様性を増し進化させていくことに可能性があると考えている。

エ 筆者は、人間として生きることの意味は変化していくものであるかもしれないが、そうありたいと願う未来を考えながら、人間の可能性を探り、理解しようとすることそのものにあると考えている。

オ 筆者は、ロボットの技術を発展させた未来は人間にとって完全な肉体を必要としない幸福をもたらし、福祉の充実と可能性が拡張していけるので、ロボットと人間が有機的に結合していくことが望ましいと考えている。

受験番号

□	□	□	□	番
---	---	---	---	---

氏名

得点

※

※には何も書かないこと

一	
問一	問一
⑥	①
⑦	②
⑧	③
⑨	④
しい	
⑩	⑤
	む

問二	問三
(1)	(1)
(2)	(2)
B	(2)
C	
D	
(2)	

※

二	三
問一	問一
問二	問二
問三	問三
問四	問四
問五	問五
問六	問六
問七	問七
問八	問八
問九	問九
問十	問十
問十一	問十一

※

(1)	(1)
(2)	(2)
1	4

※

ア
イ
ウ
エ
オ